
死なないゾンビ

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死なないゾンビ

【Nコード】

N2207W

【作者名】

ちゃんこっ

【あらすじ】

無職の男 楠 信吾

彼は昔ゾンビと戦った経験があったため、ゾンビのことには詳しい。そして、男はもうゾンビと戦わない決意をした・・・

だが、ある日、一通のメールが届いた・・・そこに映っていたのゾンビ！

何が起きているか、わからない信吾・・・

このメールが本当かどうかを確かめるために信吾は、メールにうつっている場所を目指すのであった

ゾンビとメール

俺の名前は楠 信吾

無職だ

いや、これは不況の影響とか関係ない

自分で決めたから・・・

もう、重たい荷物は背負わないと・・・

決意していたのに・・・

決意していたのに・・・

なんで、こうなってんだあああああああ！？

俺は、人の群れに囲まれていた

正確には、人じゃなくゾンビだが・・・

そして、俺のそばには女子高生が数人・・・

・・・こんなことになったのも数時間前にあんなメールが来たからだ・・・

数時間前

ピリッピリッ！

信吾：「ん？電話か？」

っピ

信吾：「はい、もしもし？」

信吾：「もしもし？」

・・・ん？おかしいな電話・・・しまったこれメールの音だ！

恥ずかしい〜まあ、誰もいなかったからよかったけど

一体誰だ？こんな時間に・・・

そう、今は0時・・・

ちょうど日付が変わったころだ

信吾：「こんな、時間にメールなんて送るなよ・・・」

それにしても、変だ・・・

よくよく、考えたら俺はメアドを誰にも教えたことないのに

でもって、携帯の番号も誰のも教えていない・・・
じゃあ、誰だ？

俺は急にメールを見るのが怖くなった・・・
けど、そのまま放置しても仕方ないので勇気を振り絞って見た・・・
そこには・・・

アドレスはデタラメの文字

さらには、本文など何も書かれていなかった・・・

信吾：「なんだ？このメール？悪戯か？」

そう言えば、最近のニュースで携帯会社すべてハッキングされたって言っの見たな・・・

信吾：「悪戯だな・・・よし、削除！！」

俺は、そのメールを消した！

信吾：「はあゝ眠い・・・」

今後、こんなメール来ても迷惑だから明日にでも、解約しよう
そう言えば、消したメールに何か付いていたよな・・・
なんだろう？

俺はデータフォルダを開けて一番上にある、データを見た

そして、その中には・・・

俺の見慣れたものが移っていた・・・

普通の人はこれを見ただけではゲームかなんかに勘違いするだろう
でも、俺は違ったその写真を拡大などして・・・ようやく、わかった
死体が動いていることが・・・

世間では、公表されてはいないが・・・どこかの組織では、ゾンビ
の研究が完成したことは知っていた

俺は、ぞっとした

なんで、こんな写メが俺の携帯に送られてきた？

もしかして、俺は見張られているのかも知れない・・・

そして、俺はこの写メに夢中になった・・・

だが、その十分後に新たなメールが来た

今度はメールに本文が書いてあった

「ごらんになりましたか？
もしご覧になったのなら

次の携帯番号まで・・・」

俺はその番号にすぐかけた

だが、一向に出ない・・・

もう一回かけようとしたら・・・

メールが来た

「電話ありがとうございます」

それだけだ・・・と思っていたがこのメールには動画が張り付けられていた

俺はその動画を見た・・・

そこには、ゾンビが女子高生らしき人を食べている姿が映っていた・

・

だが、俺にはその食べられている女子高生に見覚えがあつた・・・
いや、それだけじゃない。近くに映っているスーパーにも見覚えがある

わかった・・・

この子は・・・なんで今まで気が付かなかつたのだろう

この子は隣の家の娘さんだ・・・

たまに会ってしゃべったりもするから・・・知っていたけど

なら、このメールはもうこの子が死んだって言うメールなのか？

だが、死んだなんて隣の人から聞いたことなんてない

なら、今日のメールか？

しかし、このメールにはスーパーが閉まっている

確かこのスーパーは午前2時ぐらいまで開いている

クソ！考えても訳が分からなくなるだけか・・・

仕方ない・・・スーパーまで行くか・・・

ゾンビと女子高生

スーパー前

もうそろそろ午前2時だな・・・

俺は写真の場所にいた

ここなら何かあるかと思っただが血の跡はなかった

周りを確認したが今は誰もいない

そして、そう思っている内に

スーパーが閉まった

女子高性の声：「でさー」

信吾：「!?!」

娘：「あゝ確かに」

ウソだろ!?

俺は周りを確認すると向こうの方から女の子が数人あるいてくるのがわかった

まさか、来るのか・・・

いや、あの子も女子高生だしこんな時間に外出するかもしれないでも、もしかしたらあの写真通りにゾンビが来るかも知れない・・・

とりあえず、声はかけておくか・・・

信吾：「おゝい」

娘：「あ!おじさんどうしたの?」

信吾：「いや、ここらへんで待ち合わせしてるから、待っていたんだが」

娘：「あゝまさか、彼女?」

え?何で俺の後ろに指刺してんだ?

・・・つち!!

俺はとつさに振り向いた・・・

そこには、スーツの女性がいた・・・

いや、スーツの女性だけじゃない

周りを確認すると10人近くの人数がこっちよってきている
やばい、囲まれたか！

娘：「どうも、こんにちは！」

俺をすり抜けて、挨拶をした・・・その瞬間

スーツの女性：「ああ・・・があああああ！！」

娘が首元を噛まれた

娘：「きゃあああ！！痛い、助けて！！」

娘は助けを求めているだが・・・

俺は、もう感じていた・・・

この子が・・・助からないと

女子高生：「ちよつと！！あなた、すみませんがあの子を助けてく
ださい！！」

信吾：「それは、無理」

女子高生：「なんでですか！！？」

信吾：「あと、数秒かな・・・」

女子高生：「いったなにが・・・」

さつきまで、もがいていた子が急に動かなくなった・・・

女子高生：「いや！いやああああああ」

信吾：「おい！！俺のそばを離れるな！絶対だぞ！！」

女子高生：「は、はい！！」

信吾：「さて・・・ここからどうやって逃げようかな・・・」

女子高生？：「戦わないんですか？」

信吾：「勝てるわけないだろ・・・武器もなんもないのに」

女子高生？：「じゃあ、どうやってここから逃げるんですか！？」

もう、周りを見れば俺達を囲むように・・・ゾンビどもが来ている

クソ！俺一人ならこんなの楽勝なのに・・・

そう考えいる内に、一人のゾンビが襲い掛かってきた！

信吾：「くんじゃねえよ！！」

俺は、ゾンビに膝蹴りを入れ、そのあとに顔面を地面に叩き付けた
そして、最後に頭を踏み潰した・・・

グシヤ

信吾：「これで、一人はおわ・・・」

ガシ！！

ウソだろ！！

なんで、こいつ脳をつぶしたのに・・・

動けるんだ！？

信吾：「つチ！！」

俺は捕まれた足を動かした

そしたら、すぐに取れた

信吾：「こいつら、まさか脳つぶしても動くのか？」

女子高生：「なんで？ゲームなら動かなくなるのに」

信吾：「お！？お前詳しいな・・・」

女子高生：「誰でも、知っていますよこれくらいのこととは」

さて、冗談をこれくらいにしておかないと・・・

マジでピンチだ

一人だけ脳をつぶしたけどまだまだいる・・・

しかも、つぶした奴はまだ動く・・・

信吾：「絶体絶命かな、これは・・・」

ゾンビと作戦

さて、ここで選択だ・・・

俺は命が惜しいなら、このままゾンビを2、3体倒して逃げればいいでも、この子達守るとするなら、命の保証はできない・・・

・・・俺は考えた末に・・・

この子達を一時的に守ることを優先にした

信吾：「おい！！女子高生ども！！そのスーパーに行け！！」

女子高性：「そんな、こと言われても無理です！最低でも二人のゾンビを相手にしないと・・・」

信吾：「それぐらいは、俺がやる！！・・・」

俺はそう言っつて、スーパーへの道を作った

女子高生：「・・・すごい」

信吾：「早く行け！！長くは作れないぞ！！」

女子高生？：「は、はいありがとうございます」

よし、あの子たちはこれで大丈夫だと思う・・・

さて、俺はどうやって逃げよう・・・

俺も、スーパーへ逃げるつて選択肢があるんだが・・・

それだと・・・あの子たちが危険になるからだめだ

ならもう、いつそのこと、一旦こいつらを引き付けて一気に倒すか

それとも、地道に一体ずつ動きを止めるか・・・

待てよ・・・よく考えたら俺はこのゾンビ達の殺し方を知らない・・・

クソ、仕方ないこいつらを・・・俺の家に引き寄せて殺し方を探るしかねえか

なら、ゾンビを誘導する必要があるな・・・

こいつらゾンビを引き付けるには、簡単だ

ゾンビは目は使わないが・・・鼻がよくなっていた

そして、こいつらの一番の目的は食べること

なら、匂いが強い方に来る・・・
よし！！とりあえずは、この作戦で行こう！

ゾンビと匂い

信吾：「はあはあ、ここまで、ちゃんとついてきてるのか？」
俺は後ろを振り返って確かめてみた

・・・ちゃんとゾンビがついてきてる

信吾：「とりあえずは、このまま家に行くしかないよな」

信吾：「それにしても、この服そんなにくさいかな？」

俺は、引き付ける方法として自分の血を服にしみこませた

そしたら、ゾンビどもはこっちを向き追いかけてきた

それは、よかつたんだが・・・

微妙に自分ってそんなに匂うの？って疑問に思う

おっと、そう考えている内に家につい・・・

ウソだろ？

なんで？

こんなところにまで・・・

ゾンビがいるんだ？

しかも、十体とかそんな数じゃない・・・

見渡す限りに・・・ゾンビがいる

やばい・・・

さすがに、きついな

このまま、家に突っ込んで多分死ぬと思う・・・

なら、ここは

逃げるが勝ち！！

俺は逃げた・・・

走って逃げた

そして、

20分後

信吾：「はあはあ、ここまで、逃げればいいだろ」

思ったよりもゾンビの足が速くなかったから逃げ切れた・・・

とりあえず、宿をとらないと・・・

このまま外で野宿したら多分食われるし

お！こんなところに孤児院がある・・・

仕方ない、今日だけここに泊まらせてもらうか

俺はそう思っただけでインターホンを鳴らした

しかし、おおきな孤児院だな・・・

女性：「はい」

信吾：「あ、すみません」

ゾンビとスラッシャー

女性：「お断りします!!」

バン!!

・・・世間は冷たい・・・

つと考えている場合じゃない!!

でも、このあたりでここ以外に・・・

そう思った時だった

女性：「きゃああああ!!」

悲鳴!!クソ、ゾンビが来たのか?

信吾：「大丈夫ですか!？」

俺は扉をたたいたそしたら・・・

中から開けてくれた

子供：「助けて!!」

泣いている・・・中で何かが起こったな・・・

信吾：「よし、任せろ!!」

俺は悲鳴の方向と血の匂いを頼りに向かった

・・・多分もう一人は確執に死んでると思いつながら

信吾：「この先かな？」

そこは、みんなで食堂だった・・・

ゾンビさえいなければ今頃・・・

俺はあたりを見回した・・・その先には二人の女性がモップを持っ

て男のゾンビと対峙している

女性：「来ないでください!!」

女性は足を震えている

だが、そんなこと男のゾンビには関係なく・・・

今にもかみつきそうな感じで歩いていく・・・

俺は走って男のゾンビの体を力限りに蹴った!!

ゾンビは吹っ飛んだが・・・ダメージは全くない

信吾：「おい！！さつさと逃げる！！」

俺は女性に呼びかけた

女性：「駄目です、この扉の向こうには子供が・・・」

信吾：「なら、そいつらを連れて二階に行け！！」

女性：「は、はい！！」

女性は後ろに会った扉を開け中から子供数人を連れていこうとした。

・

その瞬間・・・最悪のことが起きた

バリッ！！！！

窓が割れる音がした・・・

その割れた方向のは・・・

ゾンビの進化した・・・スラッシャーがいた

スラッシャーとはゾンビが一定の期間血を出し続ければごくまれに進化するゾンビ

スラッシャーの両手は骨が尖った状態で向き出ている

それがに切られると血が当分止まらなくなる

これは実体験だから言える・・・こいつは相手にはしてはいけない！！

だけど・・・だけど・・・俺が戦わないと・・・ここにいる奴らは全員死ぬ・・・

信吾：「やるしかないか・・・」

俺は覚悟を決めてスラッシャーに近くにあつたナイフを持ち攻撃した死ぬ覚悟で向かった・・・少しでも足止めができれば・・・そう思っていた

だが、現実是非常だった・・・

スラッシャー：「うがああ！！！」

時が止まった・・・俺にはそう感じた・・・だってスラッシャーの手が俺の目の前にある・・・ちよつとでも動けば当たりそんな距離に・・・

死んだと思った・・・もう無理だ・・・何もできない・・・実際に

体が動かないしな・・・

ごめんな・・・守ることができなくて・・・任せろって言ったのに
な・・・

次の瞬間・・・俺は・・・死んだ・・・

ここはどこだ？確か孤児院で死んだじゃなかったけ？

俺は水槽みたいなのに入れられていた・・・ここがどこだか分らな
かった

しかし、なぜ俺が生きているかわからなかった・・・
近くに誰もいないな？

俺は確認して、水槽をぶち破った

ガッシャン！！

信吾：「ふう・・・ここは本当にどこだ？研究所ばい・・・」

ゾンビと研究所

ウーウーウー

警報機：「何者かが侵入した模様、速やかに排除せよ。繰り返す、何者かが侵入した模様、速やかに・・・」

つち！まさか、さつき出るために壊した水槽のせいか？

俺は近くにあった作業服を着て逃げた・・・そして、逃げた先にはアサルトライフルを持った兵士らしきものがいた・・・

兵士：「いたぞー！！」

信吾：「クソ！！」

俺は近くにあった机を盾にして弾丸から身を守った
ほんとにここどこなんだよ！！

俺は机を盾にしながら移動した・・・そして・・・

ガン！！

信吾：「クソ！！行き止まりか！！」

俺は通路の行き止まりにいた・・・後ろから足音が聞こえる・・・
はあ、ここで俺は終わるのか？・・・別のそれもいいかな？俺だっ
て結構生きてきたんだし・・・でもなあ、18歳で死ぬのはなあ・・・

俺はこんなピンチなのにのんきなことを考えていた

兵士：「動くな！！」

後ろから声が聞こえる・・・終わった・・・

そう思った時、違和感に俺は気が付いた・・・

あれ？あの兵士の天井・・・へこんでないか？

俺はさつき思いつき蹴つたのに、傷一つつかなかつた頑丈なのに・・・
・・・どうして？

俺は一つの可能性を試した・・・

信吾：「なあ、お前ら、生き残りたいよな？」

兵士：「ああ、お前はここで俺達が殺すがな」

ゾンビと研究所（後書き）

結構ゾンビネタ書くのって難しいですね（＾－＾）
（；）

ゾンビとガトリングのスラッシャー

・・・その姿は・・・スラッシャーに似ていたが違う・・・なぜなら、スラッシャーは・・・両腕がガトリングじゃない！！

キュウー！ルーン

やばい！！俺はとっさに近づき、両腕を上蹴った

ガガガツガガ！！

ウ・・・ソ・・・だろ？上には穴が開いていた・・・こいつが落ちてきた穴だが・・・その先には・・・こいつに似ているのが・・・5体ほど・・・いた

信吾：「うおおおおおおお！！！！」

俺は全速力で走った・・・どこかに出口がないかと・・・だが・・・

信吾：「クソ！！ここも行き止まりか！！！！」

クソ！！クソ！！もう、俺には手が残ってないのか！？

後ろから足音が聞こえる・・・俺の手元にはアサルトライフルが残り10発ほど・・・

勝てない・・・どんな手を使っても絶対に・・・

・・・また、諦めないといけないのか？さっきみたいな奇跡は多分もう起きないしな・・・

俺は・・・覚悟を決めた・・・あの、両手がガトリングのスラッシャーと格闘・・・することを

スラッシャー？：「ウゴオオオオオオオオオ！！！！」

信吾：「来たか・・・ウオオオオオオオオオ！！！！」

俺は、スラッシャー？の腕を狙った・・・あいつが乱射してほかのやつを殺そうと思った・・・だが・・・

信吾：「ガアアアアアア！！！！」

なんだ！？今の・・・俺の声か？

自分で行っておきながらおかしな声が出た・・・まるで、あいつらと同じ化け物のような声が・・・

ゾンビとカラス

ドーーーーー

俺はこの研究所みたいなのを爆破した・・・
あんな施設があつてはいけない・・・俺みたいなのを増やしては
いけない・・・

俺は復讐を誓った・・・俺をこんな体にした奴に・・・こんな研究
をしている奴を・・・皆殺しにしようと・・・
久しぶりに外に出た気がする・・・俺は一体どれくらいの間あの水
槽の中にいたのだろう・・・

とりあえず、今日が何日かが知りたい・・・確か、俺が死んだ日が
大体2000年の4月だったな・・・
俺はとにかく、車を待つことにした・・・

7時間後

えーっとみ・・・み・・・み・・・クソ!!!もうない!!!
俺は一人しりとりをしていた・・・

むなしい・・・つと落ち込んでいる場合じゃなかった。それにして
も、ほんとに車一台も通らないな・・・
仕方ない、走るか
俺は走った・・・

30分後

・・・こんな近くにあつたんだ・・・町・・・
はあ、もう日が暮れてきたな・・・まあ、悔やんでも仕方ない
俺は町に入り口に行った・・・それが、地獄の入り口とも知ら
ずに・・・

お！喫茶店ある・・・あゝでも、今の俺金ないんだよなあゝ仕方な
いスルーするか
とにかく、そこら辺の人に聞くか・・・

信吾：「すみません？今日何年の何日ですか？」

女生徒：「ええ〜つと確か、3000年の5月7日だったと思います」

え？今なんて言った？3000年の・・・3000年？ウソだろ？

俺は1000年も水槽で生きていたのか？いや、ゾンビだから死んでいるか・・・

信吾：「すみません、もう一つだけ」

女生徒：「早くしてくださいね？もうすぐ、夜になるので」

信吾：「わか・・・夜？」

女生徒：「早く、あなたも家に帰るか銃を持った方がいいですよ？ゾンビがきます」

信吾：「ゾンビ!？」

女生徒：「驚くことじゃないでしょ？」

信吾：「ありがとうございます!!!!」

俺はこの場から逃げた・・・怖くて・・・そして、ゾンビのことを驚かないことが一番恐かった・・・

信吾：「まさか、俺が1000年いない、内に・・・ゾンビは人を食いつて来たつてことか・・・」

はあ、この場合人間が生きていたことが驚きだな・・・まさか、一般人に銃を持たせるのを許してるとは

信吾：「ん？なんだあれ・・・」

俺は夕日の方に向いた・・・ほかの人も見ている・・・

夕日の陰でよくわからないが・・・何かが空を飛んでいることがわかる・・・

信吾：「みんな!!!早く室内に行け!!!」

俺はわかった・・・あれは、カラスだ・・・

あれを防ぐ方法は火炎放射で焼くか・・・それとも、莫大な弾を使って全部撃ち落とす。それか、カラスが入りにくい場所に逃げるか・・・

だから、町などでは室内に入って何とかするのが一番いい・・・
だが、それを知らないのか・・・町の人の反応は・・・
無視・・・だれも、もう夕日の方を向いていない・・・
多分この人たちは・・・ゾンビしか見たことない・・・人間の・・・
やばい・・・俺は逃げないと・・・何とかして生き残らないと・・・
その時、一匹のカラスが・・・一人の住人を襲った・・・

ゾンビと決意

!!!!!!!!!!

俺はとつさに研究所で拾った、拳銃でカラスを撃った

Bannon、Bannon

2発撃った……だが、カラスは襲うのをやめない……弾は当たっているのに……

女の子：「きゃあああああ！！！！！！」

放送機：「警戒体制のレベルを1まで上げます！！！！住民の皆さんは早く避難場所に戻ってください！！！！！！」

うああああああああああ！！！！

クソ！！！！住民はみんなパニックになってやがる！！！！

避難場所はどこだ？

男：「早く避難しろ！！こっちだ！！！！」

あつちか！！！！俺は移動しようとした……その時、気が付いたみんなが避難する中で一人だけ立ち止まって……「おかあさん、どこお？」と泣いている……女の子がいることに……

信吾：「……ちくしょおおおお！！！！」

俺は……助けることにした……

信吾：「おかあさんを探してやる！！！！だから、こっちに来い！！！！」

女の子：「へ？」

俺は女の子を抱えたそして、避難場所に逃げようとした……が

ガシャー……

閉まった……避難場所の入り口が閉まった

？：「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

！？

なんだ？またスラッシャーか！？

俺は声がする方に向いた・・・だが、そこには何もなかった・・・
? : 「ガアアアアアアアア!!!」

ブン!!!

目の前を何かが・・・何がいる・・・俺は片手で女の子を抱いて・・・一歩一歩・・・後ろに下がった・・・

女の子 : 「ねえ、私死ぬの?」

!!!!!!!

俺は・・・スラッシャーと戦った時・・・未知の化け物と戦った時より・・・衝撃が走った・・・

なぜなら・・・こんな小さい・・・子供が・・・死ぬと言った・・・

親離れも・・・親に甘えてもいい年頃の子供が・・・死の瀬戸際にいる・・・

俺はこの時、心の中で決めた・・・俺が、俺が・・・復讐だけじゃない・・・俺がこの世界を・・・この世界を変えてやると・・・

ブン

何かが俺に当たろうとしていることが分かった・・・

俺は拳銃を持っていて右手でその何かを思いつきり殴った!!!

不思議と何かがどこにいるかが俺には分かった

? : 「ウガ、ガア。」

声がしなくなった・・・動かなくなったみたいだ

よし!!今のうち・・・つてどこに行けないんだ?

周りにはカラスで住人を食っている・・・

避難場所は閉じている・・・

逃げ場がない・・・

女の子 : 「ねえねえ、私の家行ってくれない?」

信吾 : 「何か忘れものか?」

女の子 : 「ううん、私の家から避難場所に行けるし、そこからこの町の外にも行けるから」

信吾：「よし！！行くぞ」

俺はこの子の家に行った

地下避難場所

信吾：「おーい、誰かいないのか？」

俺は地下で懐中電灯を持って歩いてた

信吾：「方向こつちであつてるんだよな？」

女の子：「うん！」

元気だな・・・ほんとさつきまで死ぬ一步手目にいたなんて思えな
いな・・・

俺はそう思った

中央広場

女性：「あ！佐奈ちゃん！！！」

佐奈：「おかあさん！！！」

俺は抱えていた女の子・・・佐奈を下して母親の元に行かせた

母親：「佐奈ちゃん！！佐奈ちゃん！！！」

佐奈：「おかああさん！！！」

佐奈の母親は泣いている・・・負けずと佐奈も・・・

感動的な場面だな・・・

信吾：「ふう、よかつたよかつた」

？：「ありがとう。感謝するよ」

信吾：「ん？あんた誰だ？」

？：「私の名は守まもここの警備長だ」

信吾：「そうか」

守：「ありがとう、また一人失つたとみんな思っていたよ・・・でも君が助けてくれたおかげで」

信吾：「いいよ、礼を言われなくても・・・俺がしたかつたんだから」

守：「そうか」

信吾：「っで、これからどうするんだ？」

守：「ここから、地下鉄で町の郊外に出る。そして、あたらしい街

にいくよ」

信吾：「へえ」

そう言った時だった……

ゾンビとゾンビの方

っげ！

グウ~~~~

俺の腹が鳴った……

守：「ははっは、こっちにきたまえご飯を用意するよ」

信吾：「すまねえな」

守：「さあ、こっちだ」

俺は飯を食わせてもらった。そして、食わせてもらいながらも今の場所がどこか……なぜ、ゾンビが一般人に知られているのかを教えてもらった……

俺が1000年前の人間だというのを隠して……

守：「さて、これから君はどうするんだい？」

信吾：「ん？」

守：「いや、君がどこにも行かないならここに残って町のガードマンになってほしいんだが……」

信吾：「悪いが、それは無理だ俺にはやることがある……」

守：「そうか……」

信吾：「まあ、次の町に行くまでは一緒だし、その間だけでも守つてやるよ。できるだけな」

守：「ありがたい……なら、この銃を持っておいでくれ」

信吾：「俺には、自分のがあるんだが」

守：「はは、でもこの銃がないと多分君は死ぬと思うよ？」

信吾：「？」

守：「この銃はゾンビの動きを一定の時間だけ完璧に動けなくする、弾が6発だけ入っている」

信吾：「6発か……」

守：「ああ、だから使いどころだけは間違わないでくれ」

信吾：「りょーかい」

俺は受け取った銃を胸の内ポケットに入れた

守：「よし、多分みんなも食べたと思うしそろそろ、行きたいんだが」

信吾：「なら、俺が外の先導する・・・多分一番戦いに慣れてる」

守：「いや、それは駄目だ」

信吾：「どうしてだ？」

守：「君は客人だ。だから、私とこの町の強い男たちを連れて行ってくる」

信吾：「お前が残れよ」

守：「大丈夫、僕だつて訓練は受けたんだ」

信吾：「訓練と実践では大きな違いがあるぞ？」

守：「それでも、やらないといけない時もある」

はあ、こいつ結構頑固だな・・・

仕方ない俺もついて行った方がいいか・・・

信吾：「じゃあ、ここはお互いの意見を尊重し・・・」

ガーーーーーン

!?

信吾：「なんだ？今の音!!」

守：「もう、壊されたか!!」

信吾：「・・・おい!!お前らはさっさとお前らは地下鉄に乗って行け!!」

守：「それじゃあ、君が・・・」

信吾：「誰かがここに残らないといけねえだろ!!」

守：「それは僕が・・・」

信吾：「俺も後から追っ!!待たせとけよ？」

守：「・・・わかった!!」

守は、地下鉄がある方向に走って行った・・・

俺はさつき音が鳴った場所に行った・・・

地下鉄避難入口

スラッシャー：「ガアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

佐奈：「きゃあああああああ！！！！」
お母さん：「佐奈ちゃん！！」

バアン

スラッシャー：「ガ!？」

信吾：「つち！！もうここまで来てたか！！」

俺は入ってきた場所を見た・・・さらに、周りを見た・・・
周りには避難に遅れが数十人・・・俺の目の前にはスラッシャーが
3体・・・

俺の後ろには、佐奈とおかあさんそして・・・地下鉄に入るための
この場所唯一の逃げ道・・・

俺はまた・・・覚悟を決めた・・・

そして・・・俺はスラッシャー3体相手に・・・素手で挑むこ
とにした・・・

男：「あんた！何してるんだ。早く武器を・・・」

信吾：「おれのこととは心配するな！！自分のこと、女子供のことだ
け考える！！！！」

男：「う！！」

俺は男にそう言って・・・スラッシャーにゆっくりと近づいた・・・

スラッシャー：「ガア！！ガアアアアアアア！！！！！！」

そのうちの一体が俺に対して腕を振り回してきた・・・俺はそ
の手を・・・

指一本で受けた・・・そして、腕の刃を下に叩き割った

スラッシャー：「ウガアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

スラッシャーが痛がっている・・・銃ではそんなに痛がっていないか
つたのに・・・

俺は次にスラッシャーの腹をある程度力を入れて殴った・・・
そして、スラッシャーの一体は動かなくなった

ゾンビと食べ物・・・

ざわざわ

：「おい、あの人一発でスラッシャーを」

：「ええ、銃を撃つても動きさえ止められないのに・・・」

：「ほんとに、人間なのか？」

周りが騒ぎ始めている・・・無理もない・・・俺でさえ殺せるとは思わなかった・・・

と言うかこれ死んでいるのか？

本気で殴れば腹を突き抜けるじゃ...

まあ、いいや。人間さえ守れるんなら・・・俺は人じゃない・・・

スラッシャー：「ガアアアアアアア！！！！」

スラッシャー：「ウガアアアアアアアアア！！！！！！！！」

もう、2体が来た・・・

目の錯覚か、動きがさつきより遅い・・・これなら、一体ずつ倒しても時間がかからない・・・逃げる時間は稼げる・・・

俺が一番近いやつに蹴りを入れようとしたその時・・・さつき殴ったスラッシャーがゆっくりと立ち上った・・・

そして・・・そいつは俺に襲い掛かってきた2体を食べた・・・一瞬で、俺の目にも止まらない速さで・・・

グシャ、グシャ、ゴック・・・

食べ終わった・・・その間、5秒程度・・・多分この速さならここにいる奴全員3秒もかからない内に食われる・・・

俺がこいつを蹴り飛ばした・・・

だが、こいつは蹴りはできたが飛ばなかった・・・よく見るとこいつ・・・だんだんデカくなってきてる・・・

最初は人2人ぐらいのスラッシャーだがこいつは3、4人ぐらいまでデカくなってやがる・・・

まさか、共食いをして進化をしているのか？ゾンビからスラッシャーになったように……

なら、進化する前にやらないと!!!

もし、こいつが進化したなら俺は負ける……ゾンビ達の進化は進化前の約20倍……こいつが進化したら……待てよ？こいつ今さつきよりも早く動いていた……なら進化は始まっている!!!

止められない……倒せもしない……

信吾：「お前ら!!!ここから逃げろ!!!」

俺は叫んだ……勝てないとわかったから……一刻も早くここにいる奴を逃がさないと思ったから……

スラッシャー：「ア、ガア、グギ……ふう」

目の前のスラッシャーが「ふう」と言った……

俺は驚いた、ゾンビが日本語をしゃべっている？

そして、皮がはがれて人になった……

スラッシャー：「あゝ腹減った……お!そこのお前ちょっと食わせろ」

そう言つて、人を食べ……た

一瞬で動いた、見えただ……

スラッシャー：「食わないよりましか……よくよく、見ると

一人はごちそうだ……」

そう言つて俺を見た。

ゾンビと食べ物・・・(後書き)

最近のおすすめゲームってありますか？
できれば、PSPかPS3がいいです

ゾンビと本能

チャキ

俺は銃を構えた．．．．殴りあつて勝てないと思つた．．．．スラツシャー：「はは、なんだそのおもちゃ？死人なら死人の戦い方があるだろ？」

信吾：「俺は死んでねえよ」

スラツシャー：「そういや、名前は？」

信吾：「信吾．．．」

スラツシャー：「俺の名は、ゾータ．．．今から500年前の元人間だ」

信吾：「なんで、死んだ年を知つてるんだ？」

ゾータ：「お前は覚えてなかつたのか？ゾンビの記憶．．．」

信吾：「お前は．．．覚えているのか？」

ゾータ：「覚えてる．．．人を食つた時．．．進化するとき．．．お前に殴られて進化したのもな．．．」

信吾：「ツク．．．」

ゾータ：「いいぜ、てめえが恐怖になつているのもおもしれえ」

信吾：「変態が．．．」

ゾータ：「まあいいじゃねえか。さあ、殺させな．．．」

守：「信吾！！これ使つてくれ！！！！」

後ろから守が何か投げてきた。俺はそれを受け取つた。投げてきたものは刀

ゾータ：「死ねええええええええ！！！！」

俺は無言で鞘を抜き．．．．刀身で切つた。ゾータの首を．．．

ゾータ：「ガ．．．．甘いな」

信吾：「それぐらいわかつてる」

俺は瞬時にもう一回切りつけた．．．．今度は右手．．．次に右足

ゾータはニヤリと笑った・・・

ゾータ：「おまえは俺達が死なないこと知ってるのか・・・」

信吾：「まあな」

ゾータ：「教えてやるよ。俺の存在そのものを殺せ」

信吾：「どういうことだ？」

ゾータ：「簡単だ、俺を焼き、凍らせ、最後に塩水に浸せば・・・溶ける」

信吾：「それでいいのか？」

ゾータ：「動きを止めるのは色々あるが、殺せるのはこれだけだ」

信吾：「溶けたのはどうするんだ？」

ゾータ：「そこら辺の肥料にでもしろ、安心しな人体に影響はない」

信吾：「話を聞いている限りじゃ死んでないな」

ゾータ：「ああ、俺達は死ぬことを許されていない」

信吾：「そうか・・・」

ゾータ：「じゃあ・・・最後にいいか？」

信吾：「なんだ？」

ゾータ：「おやすみ・・・」

信吾：「ああ、おやすみ」

俺はゾータを一瞬で燃やした、方法は秘密だ・・・

そして、凍らし、塩水に浸した・・・

みるみる、ゾータの体が溶けていく・・・

（俺もいずれかはこうなるんだよな・・・）

死んでゾンビになったものは死ぬことを許されていない・・・

死んだ方がどれほど、楽なのかがよくわかる・・・

永遠の命もいらぬ・・・ほしいのはただ死ぬこと・・・

それが、ゾンビになったものの・・・最後に思うこと・・・

ゾンビと誓い

俺は塩水になった、ゾータを小さな瓶に入れた・・・
こいつをどこで捨てるか、考えておかないとな・・・
さて、ここからどうしよう？

周りの人たちは俺を見ておびえて・・・

佐奈：「すごーい」

信吾：「は？」

思わず変な声が出た

佐奈：「だって、信吾が助けてくれたんでしょ!？」

佐奈が俺に抱き着いてきた・・・

・・・褒められたのか？

俺の思考がついてこない。だって、目の前に化け物がいるのに・・・
周りの人たちはまだ、おびえている・・・

なのに、なんで佐奈は俺に抱き着いてくるんだ？

守：「・・・信吾、ちよつと来てくれないか？」

信吾：「ああ」

俺はうなずき、守の後について行った・・・

その時、佐奈が俺についてくるって聞かなかつたから、隣には佐奈がいる・・・

佐奈のお母さんもいるが俺に対していい印象を持っていないっぽいし
守は守で何考えているかがわからない・・・

信吾：「はあ」

思わずため息が出た・・・

どうしようかな、これから親玉の場所がわかればそつこく殺すんだ
が、わからないから情報を集めないといけないし、ここにいる人たちをほっておくのもなんだし

守：「ついたな・・・みんな二人つきりにしてくれ」

着いた場所は、牢獄・・・

いや、昔牢獄として使われていたであろう場所に来た

信吾：「どうするんだ？おれを」

2人つきりになった後に聞いた

守：「別にどうもしない、だが俺達人間を殺すなら信吾を倒さないといけない」

信吾：「遠慮せずに言えよ、俺が怖いって」

守：「大丈夫、怖いとは思っていない・・・」

信吾：「は？」

変な声が出た、だって怖くないってどんだけ度胸あんだよ

守：「だって、君は僕たちを助けてくれた・・・恩人に怖いなんて失礼だろ？」

信吾：「・・・はは」

笑えるな・・・こんな人間もいるんだな・・・

よし、決めた今だけこいつら守ってやる・・・

いや、人類すべて俺が救い出してやる

そう、俺は心に誓った・・・

ゾンビと信号弾

守：「それで、本題だが」

信吾：「なんだ？」

守：「隠れながら、僕たちについてきてくれないか？」

信吾：「なんで隠れながら・・・そうか、確かにあの後だと、怖がるやつが多いな」

守：「そうだ、だから頼む・・・ずっとじゃなくていい、せめて安定している場所まで・・・」

信吾：「いいよ、別に・・・そのつもりだったからな」

守：「ありがとう・・・後、あの刀は信吾にあげるよ」

信吾：「いいのか？」

守：「僕たちは使う時がないから別にいいよ」

信吾：「そうか・・・なら、ありがたくもらっていく」

俺はそう言って、拳銃を守に渡した・・・

守：「これは？」

信吾：「中には信号弾・・・一発だけ入っているそれを合図に俺はお前らを助ける・・・いいな？」

守：「わかった」

守はうなずき、拳銃をポケットに入れた

そして、俺は元の場所に戻った・・・

佐奈：「信吾！！」

信吾：「うわ！！」

また、抱き着いてきた・・・

はあ、そう言えば俺、佐奈になつかれてるんだよな・・・

信吾：「あれ？おかあさんは？」

周りを見るといない・・・

おかしいな？さっきまでいたのに・・・

佐奈：「多分、厨房にいつてない？」

信吾：「そうか」

佐奈：「それより、信吾！あそぼう！！」

信吾：「・・・すこしだけだぞ？」

そうして、遊ぼうと思ったが・・・

そんな時間はなかった・・・

俺は入ってくる人の方に走った・・・

途中にいたゾンビはすべて殴ったりけつたりして道を開けさせた

：「は！！あなたは・・・」

信吾：「そんなことどうでもいい、なんでこっちにくるんだ!？」

：「仕方ないじゃない!!こっちに・・・ゾンビがいるんだから!
」

信吾：「やつぱりか・・・」

俺のいやな予感は当たった・・・

最悪だ・・・一か所じゃない・・・

今わかつているだけでも2か所・・・

どうする?このままだと・・・

ぜ ん め つ だ

ゾンビと地下鉄

(クソ！どこに安全な場所があるんだ!?)

俺は頭の中で探し回った・・・そして、思い出した・・・

(待てよ・・・確かゾータと戦っている時、守たちは地下鉄で安全を確保しているはず・・・なら)

信吾：「おい！！確か次の町への地下鉄は安全だよな!？」

：「はい、確かめたので・・・」

信吾：「なら、今やることは道を開けなきゃいけないことか・・・」

俺は佐奈を抱きながら、右手で刀を使い道を開けた

信吾：「さっさと行け!!！」

：「あなたはどうするの？」

信吾：「この子を母親を探す、いいから行け!!俺の心配はするな!!！」

俺はそう言っつて、佐奈の母親を探しにゾンビの群れに突っ込んでいった

調理室

信吾：「っチ！ここにもいないのか!?佐奈ほかに心当たりはないか？」

佐奈：「・・・・・・・・」

佐奈は無言で首を振った

(どうする?・・・もう避難した方がいいんだが・・・)

多分もう佐奈の母親は死んでいるか、それとも避難しているか・・・どっちかだ・・・後者の方だったらいいが、死んでいたらゾンビ・・・

せめて、人を殺す前に溶かしてやりたい・・・

俺はそう思いながら調理室を後に、出た

変な匂いにきづかず・・・

地下鉄入り口

守：「こつちだ！！信吾！！」

銃撃の方向から守の声が聞こえた

（とりあえず、佐奈を置いてから後で母親を探すことにしよう）

俺は守の方に走ったその時・・・

スラツシャー：「ウガアアアアアアアアアア！！！！」

俺と守たちとの間にスラツシャーが5体現れた・・・

信吾：「守！！行け！！こつちはこつちでなんとかする！！」

守：「だが・・・」

信吾：「俺はお前らと違う！！女の子一人ぐらい抱えててもこいつらぐらいならなんとかなる！！」

守：「・・・わかった、後から来てくれ！！」

そう言つて守たちは地下鉄に乗り込んで出発していった

（クソ！！ああいう風に行つたが結構きついな・・・）

スラツシャーと攻防しながら考えていた・・・

まだ、刀があるから何とかなっているが片手で佐奈をずっと抱えているのはつらい・・・

しかも、5体・・・

無茶な回避をすれば佐奈にどんな影響がでるかわからない

しかも、俺はゾンビだから血で感染する恐れがある・・・

絶対に避けて、なおかつスラツシャーを倒さないといけない・・・

（クソ！！まだ銃があればなんとかなつたかもしれないが）

俺はちよつと後悔しながらこの場を離れて行つた

ソニーと地下鉄（後書き）

最近、面白いゲームがなかなか出ない（+o+）

ゾンビとチン

調理室

俺はまたこの場所に戻ってきた・・・
仕方がない、相手は死なない・・・
どんだけ戦っても疲れるだけだ・・・

俺はそう思いながら食料を探すことにした
この先何があるかわからない・・・

ならすこしでも佐奈が食えるものを用意しとかないといけない
おれは・・・まあ、一年位食わなくても大丈夫だろ

そう考えながら冷蔵庫を開けた・・・
中には肉などが入っているが、怖いな・・・

仕方ない缶詰を探すか・・・

佐奈：「ねえ・・・あれってなんだと思う？」

信吾：「ん？」

佐奈が何か指差している・・・

まさか、ゾンビかスラッシャーがもう来たのか？

一応、足を切つて置いたけど・・・

だが・・・俺の予想を上回った、答えが・・・現実の答えだった

？：「たす・・・ガア、ウグ・・・け・・・」

なんだ？あれは・・・

外見からではただのデブだ・・・

だが、腹から何か出ている・・・

あれは・・・人？

知らないぞ？こんなやつ・・・

まさか、スラッシャーの進化後とかか？

俺はそう思い・・・佐奈を抱きしめ、逃げ道を探しながら後ろに下がって行った

母親：「助けて・・・だれ・・・か・・・」

!

?

とつさに佐奈の視界を手でふさいだ・・・

佐奈：「今の声って・・・まさか、おかあさん？」
最悪だ・・・

こんな最後かよ・・・

佐奈の母親はどんどん腹に吸い込まれている・・・

もしかしたら、助けられるかもしれない・・・

だが、あいつに近寄ったらだめだ・・・

俺の本能が警告する・・・

何が起きるかはわからない・・・

けど、絶対に近づくことだけは駄目だ・・・

俺はそう思い、その場を後にした・・・

ゾンビと「嫌い」

【地下鉄通路】

あの場所からなんとか脱出し、今はゆっくりと地下鉄を歩いている。

・

その間・・・佐奈は・・・

佐奈：「・・・う、ひっく、うう・・・おかあさん・・・」
ずっと泣いていた・・・

俺は自分が嫌いになりそうだ・・・

いや、もみずつと前から嫌いだ・・・

いつだって、俺はあと一歩のところまで失敗して、見捨てる・・・

そんな自分が大っ嫌いだ・・・

けど、いつからだろう・・・

俺がこんな臆病になったのは・・・

生まれた頃から？

そうかも知れない・・・

だけど、臆病になるにはなんかきつかけがあったはずだ・・・

無職で・・・一人暮らし・・・

誰も関わりを持ちたくなかった・・・

あの頃・・・学生時代・・・

・・・そうか、わかった・・・

思い出した・・・

俺がこんなふうになったのは・・・

俺のせいで、俺のせいではない・・・

ただ・・・不運が重なっただけ・・・

俺の一番・・・思い出したくない・・・

・・・記憶・・・

それが、俺をゾンビ達に戦うことにした・・・

一番の理由かもしれない・・・

ゾンビと過去

俺は学生の頃、いじめられていた・・・
引きこもりたりもして現実逃避をしたことがある・・・
けど、現実には甘くない・・・
家にいたら、家族の視線が怖い・・・
学校に行くにしても怖い・・・
どっちも嫌だ・・・
そんな毎日だった・・・
けど、ある日・・・
修学旅行で海外に行くことになった・・・
俺はそこで逃げた・・・
幸い、俺は英語などの他国語がしゃべることはできる
・・・逃げるのは失敗だった・・・
だって、人が食われているところを・・・
俺は逃げた、そして・・・数時間後目撃をした・・・
路上で・・・昼間・・・
銃を構えている人がいた・・・
その人たちはみんなヘルメットをかぶり顔が見えなかった・・・
服は防弾チョッキのようなもので、革靴を履きみんな戸惑っている
・・・
周りには男や女が囲んでいた・・・
そして・・・発砲と同時に一人が食われ・・・
他のみんなは逃げて行った・・・
逃げる方向はみんな一緒だ・・・
そして、始まった・・・
ゾンビの地獄が・・・
俺はすぐさま引き返そうと思った・・・
だが、足が動かない・・・

何もできない・・・
地面を這いつくばって逃げるしかない・・・
恐い・・・恐い・・・
嫌だ・・・まだ生きたい・・・
こんなところで死にたくない・・・
誰か・・・誰か・・・
そんな思いで必死だった・・・
ゾンビの歩く速度は思ったより遅い・・・
けど、俺が動く方がもっと遅い・・・
そして・・・こっちに向かってくる時・・・
ゾンビの足が何か蹴とばし・・・
俺の体に当たった・・・
信吾：「な・・・なんだ？」
俺は確認した・・・
もしかしたら・・・
そんなことを考えていた・・・
けれど、あつたのは・・・
ヘルメット・・・
他に周りには何も無い・・・
狭い路地で這いつくばっている俺とヘルメット・・・
追いかけてくるゾンビ・・・
終わった・・・
そう・・・俺は悟った・・・

ゾンビと警官

こんなことなら・・・
逃げなきゃよかった・・・

信吾：「だれか！！！！たすけてくれええええええええええ！！！！！！！！！！」

最後に・・・

気力を食いしぼり・・・

俺は叫んだ・・・

そして・・・

ゾンビが俺におおいかぶさろうとしたとき・・・

俺は意識を失いそうになった・・・

けど、女神はまだ・・・

俺を見捨てなかった・・・

拳銃を持った警官：「大丈夫かい？君！！」

駆けつけて・・・ゾンビを俺に襲い掛かってくる寸前のところで蹴

り飛ばした・・・

バアン

そのまま警官は銃を抜き、撃った

ゾンビ達は足を撃たれ・・・

動きがさらに遅くなった

その間に、警官は俺を担いで逃げてくれた・・・

ビル

拳銃を持った警官：「大丈夫かい？名前は憶えてる？」

信吾：「はい・・・ありがとうございます」

拳銃を持った警官：「名前は？」

信吾：「楠 信吾です・・・」

拳銃を持った警官：「そう、僕の名前はラック＝シャーナ、気軽にラックって呼んでくれ」

信吾：「はい・・・」

ラック：「とにかく・・・何が起きているか調べないと・・・」
そう言っつてラックは立ち去ろうとした

信吾：「ちよっと、待ってください!!」

ラック：「ん？」

信吾：「なんで、俺を助けたんですか？」

ラック：「助けたかったから助けた・・・ただそれだけだ」

ラックは建物から出て行った・・・

そうして・・・俺は足が動けるようになるまで・・・

ここで、待った

2時間後

信吾：「よし・・・動くな・・・」

俺はジャンプをして確かめた

信吾：「それにしても・・・帰ってこなかったな・・・」

もしかしたら帰ってきて一緒に逃げてくれるかもしれない・・・

けど、そんなことが・・・

あるわけがないんだ・・・

みんな自分の命が大切だ・・・

人を助ける暇があるなら・・・

自分だけが助かる道を選びたいだろう・・・

人は本当の選択を迫られたら・・・

多分、助けない・・・

たつた・・・一つの命だから・・・

けど・・・もし、永遠だつたら？

そして・・・俺は心の中で・・・

その疑問が生まれた・・・

だけ・・・

考える暇は・・・

なかった・・・

バアン

拳銃！？

確かに今撃った音がした！！

近くにいるのか？

そうして・・・

ビルを出て行った・・・

ゾンビと分かれ道

信吾：「どつちだ？銃声が聞こえたのは・・・」
ビルを出てから銃声の方に向かったら、分かれ道があった・・・
どちらも、ゾンビがいる・・・
ただ・・・右は二人・・・左は一人・・・
左の方がわずかに少ない・・・
だけど・・・
ゾンビは人が多い方に行く・・・
なら、右に行った方がいいんじゃないのか？
そう考えていると・・・
また・・・

バアン、バアン

銃声が聞こえた・・・
右からだ・・・
・・・俺は覚悟を決めて・・・
右に向かった・・・
念のため、俺は木の棒を拾っていた・・・
どれくらい、使えるかわからないけど、ないよりはましだ・・・
けど・・・俺が人を・・・ゾンビを殴れるのか？
もう、見ても足はすくまないが・・・
俺は・・・
そう考えてながらも、走っていた・・・
そして・・・人の群れを発見した
だけど・・・その中にラックの姿がなく・・・
みんな怖がりながら戦っている・・・
俺はその場を後にした・・・
助かりたいが・・・
なんだろう・・・

あの中にいたら、駄目な気がした・・・
そして・・・
その予感は的中した・・・
：「きゃあああああああ」
：「うが・・・なんだ・・・？」
：「ばけものだあああああ！！！！」
信吾：「・・・！！？」
俺は振り返った・・・
そして・・・
俺は・・・
この目で・・・
見た・・・
ラックの・・・
姿を・・・

ゾンビと宿泊

だが・・・

その姿は・・・

もう、人ではなく・・・

ゾンビでもなく・・・

ただの、化け物だ・・・

かろうじて・・・

顔が原型をとどめていた・・・

そのおかげでわかったが・・・

体は、化け物だ・・・

人を切り裂くほど、鋭い骨が突き出ている・・・

：「たすけて・・・っ！」

切り裂いた・・・

血が傷口から・・・吹き出ている・・・

人は皆・・・自分だけ助かろうとその場を離れようとする・・・

だが、ゾンビに囲まれている・・・

どんだん食われている・・・

俺はそれを・・・

ただ・・・

見ていた・・・

ゾンビ達が食い終わったようだ・・・

もう、悲鳴も聞こえない・・・

ゾンビ達はこっちに向かいだした・・・

どうしようもない・・・

最後の悪あがきぐらいしてみるか？

意味もない・・・

どうせ、数が減るだけで・・・

俺が死ぬことには変わりがない・・・

・・・どうせなら・・・

学校のやつらも巻き込めばいいんだ・・・

俺は・・・走った・・・

俺達・・・学生の宿泊の場所に・・・

ゾンビとボール

先生：「!!!・・・教頭!!楠君が・・・」

教頭：「帰ってきたか!!」

かえってすぐに先生たちに迎えられた・・・

どうやら・・・知っているみたいだ・・・

先生：「楠君!!こつちに来て!!」

信吾：「いいのか?ゾンビになっているかもしれないんだぞ?」

教頭：「?・・・一体なんのことだい?」

・・・知っていないのか・・・

なら、巻き込むのは簡単だな・・・

思わずにやりとしてしまった・・・

だって、誰も知らない・・・

このあたりで何がおきている・・・か・・・

待てよ・・・なんで知ってないんだ?

拳銃の音が最低でも聞こえているはずなのに・・・

知らない・・・振りをしている?

だが・・・なぜ?

途端に周りの人があやしく思えてきた・・・

信吾：「嫌な予感がするな・・・」

先生：「?・・・まあ、こつちで晩ごはんを食べましょ」

ガツシャーーーーーー

信吾：「つち!!」

俺はガラスの割れる音とともに、体を机の下にそむけた・・・

だが、悲鳴は聞こえない・・・

なんだ?

先生：「ツプ、楠君・・・そんなに怖がらなくてもいいのよ?」

ガラスの方向を見た・・・

そこにはボールがあり、それで割れたみたいだ・・・

せつかく、ここまで楽しいこと・・・続き？

本当に？

俺がしたかったのって・・・

こんな・・・むなしいものだったけ？

違うだろ！！！！

俺がしたいのは・・・

ゾンビと壁

【地下鉄通路】

佐奈：「しん．．．ご．．．信吾！！」

信吾：「！！？」

佐奈：「朝？だよ．．．」

信吾：「え．．．ああ、俺寝てたのか．．．」

懐かしい夢だったな．．．

あれから、だった俺がゾンビのことを知ったのは．．．

信吾：「どれくらい寝てた？」

佐奈：「多分、1時間ぐらい．．．」

信吾：「そうか．．．」

信吾：「よし！！行くぞ！！」

佐奈：「うん！！」

ギヤアアアアアアアア！！！！

信吾：「なんだ？」

姿が見えない．．．

暗闇でも．．．

そうか．．．

ここは地下．．．

声が響く．．．

暗闇での、視界の差は5分5分だが．．．

佐奈のことを考えているとやばい．．．

信吾：「乗れ！！」

俺は佐奈をおんぶして、地下を走った．．．

2、30分後

守：「信吾！！」

信吾：「やっとおい着いた！！」

守：「すぐにここを封鎖する！！」

信吾：「どれくらいかかる？」

守：「一分もかからない！！」

守は拳銃を引き抜いた・・・

そして、俺達を通ってきた上を撃ち・・・

起爆した・・・

ドオオオオオオオオオオオオオ

信吾：「・・・これで、安全は確保できたか？」

守：「いや、ここからさらに壁を作ろうと思う・・・」

信吾：「俺の出番ないよな？」

守：「ん？・・・まあな」

信吾：「なら、ちよつと飯食わせてくれ」

守：「はいはい」

そう言つて飯を用意してくれた・・・

守はいいやつだ・・・

何も聞かないでくれる・・・

佐奈：「おにくー！！」

信吾：「はっは・・・」

・・・無理だつたんだな・・・

助けるの・・・

そう、実感した・・・

笑っているが・・・

心のどこかで、死ぬほどの悲しみが・・・

あるだろう・・・

ゾンビと月日

【3年後】

佐奈：「信吾ッ！」

信吾：「おう、おかえり」

佐奈：「あ、ただいま!!」

あれから、3年がたった・・・

俺は佐奈のめんどろつを見ながらも・・・

探していた・・・

ゾンビの親玉を・・・

もう、死んでいる可能性も十分にあるが・・・

ゾンビになっている可能性がある・・・

だから、佐奈に内緒で探し回った・・・

そして・・・場所が分かった・・・

正確には、一定の範囲がわかっただけで正確な場所がわからない・・・

そして、研究所の数が多い・・・

ここから、数キロの場所やさらに遠いのがある・・・

数キロはもう調べた・・・

いなかったが・・・

ゾンビが・・・3年前と比べ物にならない・・・

スピードも、力も、知性はないが・・・

今の人間じゃ・・・

だれも、勝てない・・・

俺がやるしかない・・・

だけど、もし負けたら？

人間はもう、食料としてしか扱われない・・・

俺のようなゾンビも結構増えてきた・・・

そのたびに・・・

ゾータと同じことをした・・・

瓶の数ももう、50を超えようとしている・・・

これを・・・なにかに使えないのか？

ゾータは人体には影響はないといった・・・

もし、俺が飲んだらどうなるんだろう？

・・・軽率な行動はやめよう・・・

とりあえず、今は・・・

このことを、佐奈に話すか話さないか・・・

ゾンビと門

佐奈：「いつてきまーす」

信吾：「おう、いつてらっしやい」

夜が明けた・・・

行かないといけない・・・

結局俺は佐奈には話さなかった・・・

けど、後悔はしてない・・・

そう思いながら・・・

俺は行く準備をした・・・

【門】

警備：「あれ？楠さんここは出られませんよ？」

信吾：「門を開けてくれ」

警備：「いや、だから」

信吾：「開けろって言っているんだ」

どすのきいた声で脅した・・・

警備はすこしおびえたがすぐに聞き返した

警備：「なんで出るんですか？」

信吾：「用事でな、すぐ帰るよ」

警備：「愛用の刀と食料をそんなにもってですか？」

信吾：「ああ」

警備：「子供はどうするんですか？」

信吾：「聞くな・・・あいつだつてわかって・・・」

ドオオオオオオオオン

信吾：「！！！？」

警備：「！！？」

後ろから爆発音がした・・・

この町の周りは城壁で囲まれている

なら・・・何者かが・・・

城壁を破壊した？

信吾：「っチ！！」

俺は食料をいれたバッグを下に置き、刀だけで爆発の方向に走り出した

あっちの方向には学校があった・・・

佐奈が・・・

とても心配だった・・・

【学校】

信吾：「だいじょうぶか！？」

学校では校庭に人が集まっている・・・

訓練通りに、上級生が外、下級生が中

先生たちが周りを警戒し、警備の者を待っている

先生：「！？・・・だれです？」

信吾：「佐奈の保護者で、守りに来た！！」

教頭：「ああ、楠さん！！佐奈ちゃんは中の方にいます」

信吾：「そうか」

無事・・・と確認した・・・

スラッシャー：「ウガアアアアアアアアアアアアア！！！」

俺に対してスラッシャーが食いに来た・・・

こいつが最初に一体みたいだ・・・

信吾：「遅いんだよ！！」

俺は刀を抜き、スラッシャーを縦半分にした

そして、燃やし、凍らせ、溶かした

燃やす方法は刀の摩擦・・・凍らす方法は俺の体温・・・溶かす方

法は塩水・・・

最後に瓶に入れて・・・

しまった！！瓶を置いてきた！！

・・・このまま下に落すか？

肥料になるって言ってたし・・・

けど、なんの？

食い物？

だったらいいが・・・

別の物で人間の毒になったら？

考えただけでも怖い・・・

信吾：「つち！！」

俺は落ちていく液体を・・・

口で受け止め・・・

飲んだ・・・

そして、その瞬間・・・

俺は・・・

体の中で別の何かがつままわっているのを感じた・・・

なんだ？これは？

寄生虫が這いずり回っているような感覚・・・

信吾：「ガ・・・アガ・・・」

信吾：「ウガアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

そして・・・

俺はゾンビの栄養になったことを・・・

俺は理解した・・・

ゾンビと血反吐

信吾：「や・・・ばい!!」

このままじゃ、佐奈達を襲う可能性が出てくる!!」

俺は一目散に爆発の方向に向かった・・・

佐奈には声もかけずに・・・

【爆発現場】

守：「信吾!!来てくれたのか」

その場所は予想通りゾンビがいた・・・

中にはスラッシャーなどがいるが、俺みたいに知性を持ったやつはいないっぽい

信吾：「ここか・・・らは俺に任せろ」

守：「どうした?調子でも悪いのか?」

信吾：「いいから!!お前らは壁の修復だけを考える!!」

俺はそう言ってゾンビの中に入って行った・・・

とにかく、入ってきたゾンビを外に連れ出さないといけない

俺はそう思い、一体ずつ蹴とばし、外に出した・・・

信吾：「全部出したぞ!!・・・ガハッ!!」

血反吐を吐いた・・・

こんなこと初めてだ・・・

守たちには見えてないよな?

守：「信吾!!そこから、離れてくれ。そこをふさぐ!!」

大丈夫みたいだ・・・

そして・・・俺は戻ることができない・・・

信吾：「はあはあ、守!!」

守：「なんだ!!」

信吾：「佐奈のことは頼んだ!!」

俺はそう言って・・・

壁の外に出た・・・

大事なものはすべておいて・・・

俺がしないといけないのは・・・

そんなことなのか？

冷静に考える・・・

俺が今・・・

本当にしないといけないのは・・・

死んだものを慰めることじゃない・・・

生きている者を・・・

助けること!!

俺はそう思い・・・

戻った・・・

人間がいる・・・

守がいる・・・

佐奈がいる・・・

あの・・・場所へ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2207w/>

死なないゾンビ

2011年11月21日23時47分発行